

NHKラジオ「宗教の時間」

幸福の条件——私たちの本当の幸福はどこにあるのか

2011年5月16日収録
 (聞き手…元NHKディレクター金光寿郎、放送…2011年6月5日、12日)

奥田 昌道

東日本大震災からの復興 心の内面の回復 ひとは霊止 キリストの復活 無条件で光の国へ
 打ち碎かれた人は顧みられる 任せていけば道が開けていく 自分を投げ出す 出会いというの
 が大事 失われないものに目を向けなさい 「私が道だよ、真理だよ、命だよ」

●東日本大震災からの復興

(金光) 今度の東日本の大震災というのは、日本の歴史始まって以来の大惨事のひとつではないかと思うんですが、その影響を受けて日本人たちのいろんな喪失感だとか、これからの方向をどうしようかとか、悩んでいらっしゃる方が多いと思います。その人たちの頭の中にはこれまでの幸せな幸福な生活というものをもう一度なんとか回復したい、というようなお気持ちがおありではないかと思うんです。これからの私たちの幸福な生き方というのは、根本のところから考えると、どういうことになるのか、奥田先生のこれまでの信仰のご経験を踏まえたうえで、お話をお聞かせいただきたいと思っています。

(奥田) はい、ありがとうございます。まさに今仰ったようにこの度の出来事というのは私自身にとっても大変な衝撃でございました。今まで営々と築き上げてきたものが本当に一瞬のうちに奪い去られてしまう。財産だけならまだしも命までも、たくさんの方の命が失われたという、本当にそれは私自身にとってもショックでございました。

今、仰ったようにこれから新しくスタートするにあたって何を目指して行ったらいいのか。世間では、リコンストラクションということで、もう一度美しい日本の姿を取り戻そうという、外側の復興ということは当然のことなんですけれども、それだけではなくて、やはり私たちは心の問題、内面の問題、それをここでもう一度しっかり考え直すときがきているのではないかと、そんな感想を持ちました。

●心の内面の回復

結局、何を抛り所として何を目指して歩んで行けばいいかということです。それからもう一つは、犠牲になった方々は一体どうなるのか、ただ失われて終りということなら、あまりにも残酷ではないかというふうに思います。

常々こういったことが起こりますと、宗教にかかわる方々は、

「それは一体、天罰であるのか」



とか、あるいは、

「神の御意はどこにあるのか。神が愛ならば、なんでこんなことを放っておかれるのか」

といったことが言われるけれども、私はそれに対しては、人間の側から、

「一体、神さまの御意がどこにある」
とか、

「神さまはこう考えてこうなされたんだ」

とか、そういったことは私は絶対押し量つてはいけない、それは人間の側の傲慢だというふうに思います。

ただ言えますことは、私たち生き残った人間、それからこの度の震災でも、犠牲を免れなされた方々、そういう人たちを含めて、私たち日本人全体がやはりこの度の尊い犠牲を無駄にしてはならないと、この度の尊い犠牲から何かを学びとって、新しい生き方をしていくということがこの際必要なのではないかというふうに私は考えています。

日本人は今までもあまりにも外なるものを追い求めすぎていた。幸せというのは、財産をたくさん持つこと、立派な住居を持つて、いい職について、子どもたちはいい学校に行つてとかいうふうに、とかくこの世での競争社会で生き抜いて自分たちが豊かな生活をする、その豊かさがどうも外なるものの豊かさというところに向きすぎていたように思います。それに対して、やはり人間はそれを超えた逆の方向、つまり心の内面の美しさといえますか、尊さといえますか、永遠なるものと申しましょうか、そういうったものを求めるべきではないか。それは単なる人間の美しい願望かというところ、そうじゃなくて、やはり神さまはそれを願つていらつしやるのではないかということを思います。

●ひととは霊止

人は死んでしまえばお終いなのか、特に一瞬にしてあの津波に呑み込まれて、お別れも言えないで死んで行つた方々、それは年とつた方も若い方もあるいは子どもさんたちもみんな含めて——まあいわばいい人も悪い人も全部いつしよくたに——虚無の中に奪い去られたという、それに対して本当にそれでいいのか、それが本当にお終いなのか。いや、そうじゃない。人間はそんな安っぽいものではない、ということはどうしても私は、やはり長年キリストを信じてきた人間としては申し上げざるを得ないと思っております。

人間というのは肉体の死を超えて存続する、そういう霊の人ではないか、霊が宿つているのではないか。これは、『大言海』という大きな辞典がございしますが、あそこの「ひと」というのを引きますと、「霊止、霊が止まる」と書いてあるんです。「霊」というのは「ひと」と読みますからね。即ち、

「ひととは神霊の止まる存在」



と、そのように古代の人は考えたのではないかと解説がついている。ああさすがに日本の古代のひとはそこまで考えておられたのだなと、つまり、謙虚な気持ちでいらつしやつたのだなと思います。

●キリストの復活

では、人間は霊が止まって、死んだあとはどうなるのかということについては、やはり私はキリストのご復活という、それを申し上げざるを得ないんです。つまり、

「人間は死んでお終いじゃないよ、肉体の死をもって終わらない永遠の命があるんだよ」

ということをご自身はご自身の生涯をとおして^{あらわ}顕されたということですよ。

よく、「復活」と申しますと、なにか死体が生き返ったような印象を持たれますけれども、そうじゃなくて、キリストの場合は、もちろん死体は無くなってしまったけれども、霊体に変貌した。肉体が生き返ったというのではなくて、イエスというあの方の中にあつた霊的生命が超自然的な霊の体^{からだ}を持って^{こっせん}忽然と現れたという、そういう出来事であつたというふうに私は受けとつています。

しかも、キリストはなにも自分がそういう永遠の命となつて現れただけじゃなくて、

「それをあなた方に差し上げたいんだよ。あなた方にこの命を与えるために私は天

から遣わされて地上にやつて来たんだよ」

と、それがキリストのお心なんです。

キリストだけが永遠の命で向こうで輝いて、我々は地獄の中で苦しむというのではなくて、どんな人も全部、キリストによつて引き寄せられて向こうの世界で輝くという、そういう事態だというふうに私は受けとつています。

（金光）普通の人の考えだと、「人間は亡くなつてしまえばそれでお終い」と、そこでもう無になるみたいに考えている人が多いと思うんですが、今のお話だと、そういうことではないということですね。

（奥田）お終いではない。絶対にそうではありえない。それは我々人間の心にそういう願望が留まっています。誰も、「人は死んだらお終い。あとは物体になつた」なんて考えていないと思うんです。慰霊祭を行つたり、黙祷を捧げたり、亡くなった方の所に花束を捧げたり——たとえば交通事故がありましたも、その後長いあいだ花束が捧げられています——そういうことは、やはり人間は霊としてどこかで生きています、それはもう染みこんでいると思うんです。それを明確なかたちで、

「こっだよ、こっだよ。こつちの世界で輝くんだよ」

と言って現してくださつたのがイエス・キリストという方だつたというふうに私は受けとつているんです。



●無条件で光の国へ

キリストは天界にいらつしやる。しかしながら同時に、犠牲になった方々お一人おひとりのところへキリストは霊の姿で出掛けて行つて、一人ひとりに寄り添つてねぎら労つて、キリストにすぎる方にはどなたでも無条件に抱きかかえて天界へ導いていかれる、そういうお方だというふうに私は思っているんです。

それは、拒む人は仕方がありません。けれども、

「あつ、あなたはそういうお方でしたか。連れて行つてちょうだい!」

と言えば、引き寄せてくださるという——磁石によって地中の中の鉄くずも全部吸い寄せられるように——キリストは愛の力で引き寄せてくださる方だと思います。

「いえ、私みたいな汚い人間は大丈夫なんですか」

「いやいや、お前さんのいろんな問題を全部解決したのが十字架だよ。なにも私は自分で十字架にかかる必要はなかったんだけれども、神さまのご命令によって、世の中で苦しんでいる人や、罪に悩んでいる人や、気付かないで罪の中にいる方を、まあ、神さまに反逆しているという姿が罪なんですけれども、それを全部引き受けて、人間たちを本当の神の子にしようと、本当に天国人にしようとご命令を受けて、地上にやつて来たのが私ではないか。だから、もう『罪、罪、罪』なんて自分を責めないで、私にすぎりなさい」

というのが、私の受けとつたキリストさまなんです。だから、どなたでも無条件で光の国へ連れて行つてくれる。

ヨハネ伝第3章の中に、

「神はその独り子ひとを賜たまわつたほどに世を愛してくださった」

という、あの有名なところに、

「信ずる者が一人も滅びないで永遠の命にあずかるためである」

とあります。あそここのところでヨハネは解説しているんです。

「審判さばというのは、神さまは審かれない。光が来たのに、『光はいやだ、私は闇が好きだ』と言って、光を拒んで闇の中へ落ち込んでいく。これが審判さばになっている。本当の生き方をしたい人は光に吸い寄せられていく」

と、そういうことを言ってくれています。私はそのとおりで思うんです。人間の魂というの、自分が行きたいところへ行く。自分に似通つたところへ行く。

だから、日頃から、愛だとか、信仰だとか、その他そういう、金銀財宝ではなくて、あるいは人の欲望ではなくて、何か人のために尽くすとか、何かそういう己を超えたものを慕うような魂——無私の魂と言うかな、私無き生き方をするような、あるいは他人に尽くしてやまない方とか——そういう人たちの霊というのはキリストさまの光を見たら、

「慕わしいのはこの方だ」



と言って、もう吸い寄せられて行くんだと、私はそう受けとっているんです。

(金光) その永遠の命の世界ということになると、肉親で亡くなった方がいても、その肉親の方と「そこでもうストップ、これで永遠の別れ」という形でない世界があるということですか。

(奥田) はい、そうです。絶対にそうです。クリスチャンでない方でも、どんなお方でも、光を慕う魂は光の中へ導かれていく。そこでお会いすることができると。

私のいろんなご先祖だとか肉親だつてクリスチャンはいませんでしたし、妻の場合もそうですし。子どもたち——孫が一人もう先に向こうへ行きましたけれども——そういった子どもたちも含めて向こうの世界で輝いてくれている、そこで会えるというのがものすごく大きな慰めです。それがなかったらいやですね、私は。

●打ち砕かれた人は顧みられる

(金光) 人間の営々と築いたものが一瞬にして奪い去られて、いわば傲慢さを打ち砕かれたということですね。ただし、人間というのは、傲慢さといいますが、これはついでにすぐ頭をもちあげてきて、なんとか「自分が、自分が」というのが邪魔をするということになるわけでしょうね。

(奥田) それが「原罪」というものでしょうね。邪魔します。だから、誇り高い人はだめなんです。これは不思議なことですね。あまりにも賢かしこすぎる人、あまりにも出来る人、力がありすぎる人、自分に自信のありすぎる人、この方々は神さまに、「ちょっと待て」と言われることになるんです。しかし、それに対して、

「助けてください。私は何も抛なり所を持ちません」

と——まあ、病気の人もそうですね、生まれながらにいろいろな障害を持って生まれた人もそうです。その他いろんなことで精神的にも打ち砕かれた人——しかし、そういう人は、本当に神さまは特別に顧みてくださると思っています。

(金光) では、

「神さまのところへ私も連れて行ってください」

と、そういう言葉を本気で言えるかということ、日頃ご無沙汰していますと、なかなか……。 (奥田) それは非常に良心的な人ほどそういうことを仰るんですよ。私もいろんな人を知っています。キリスト教の私のいろんな講演会なんかにもご案内するんですが、

「自分のような者が行ってよろしいんでしょうか。私はそこまでまじめな生活を
てないんですよ」

とか、そういうことを仰るんですよ。

「いや、いや、そういうことに気付いているだけで十分ですよ」

と、私は言うんですよ。



「キリストはそんな立派な人間を呼ぼうとは思っておられない。出来損ないを立派な人間に仕立て上げるのがキリストの——まあ、生き甲斐といつたら変だけれども——仕事なんであって、あまりにも立派すぎたら、キリストが出る幕がないじやありませんか」

と、そんなふうに申し上げるんです。
パウロさん自身が、

「私は罪びとの首^{かしら}」

と言ってますもの。事実、あの人はキリストを迫害したんですからね。それも宗教的熱心で迫害した。心にもなく迫害してしまっただけですけれども。

それでなくなつて、やはりいろんなところで人間は神さまの光に照らされたら、これはちよつと居ても立ってもいられない。そこで逃げ出してしまふのか、

「助けてください」

と言うか、それじゃないでしょうかね。

●任せていけば道が開けていく

（金光）そういうのを聞くと、まだこの世にしがみついている人間は神さまに、「助けてください」と言つても、「では、お金を貸してやるから、これで家を建てなさい」とか、そういう形の助け方ではないわけですよ。まあ、そういう場合も出てくるかもしれませんが、でも、その今の自分の望みをそのまま実現するような形での救いということなのか、あるいは、自分自身のそういう考え方を御破算にして、

「もう一度、光の方向へ進みなさい。神さまがこういう方向ではないかと仰る方向

へ行かなくてはいかん」

ということになるわけでしょうね。

（奥田）そうですね。私はそんなすごい経験というのはないけれども、確かに私も行き詰まつて、本当にどなたであつても私に、

「この道を行け。お前はこの道を行けば大丈夫だ。私が責任を持つ」

と言つてくれる、そういう方に出会いたかつたんです。その時にキリストを伝えてくれた方があつたものだから、本当に私はそこに踏み出して行けました。それから以後というのは、あまりこの世の財産とかそんなものに対する執着はなかったですね。

というのは、キリストは、

「必要なものは添えて与えるから、まず私を求めてきなさい。神の国を求めなさい。

そうすれば、必要なものは全部添えて与えられる」

と。必要なものは本当に与えられます。それまでは、自分が責任をもって家族を養い、自分がすべてをやらなければならない。自分がやはり責任者なんですよね。自分がやらないと、



誰がやってくれるかと。

(金光) そう思いますよ。どう生きていくか困っている人はそこで困っているんじゃないですか。自分がやらなければいけないのに、手がかり足がかりがなくなったところ、おそらく途方に暮れている人もいらつしやると思うんですけれども。それが神さまの仰る方向ということになってくると……

(奥田) それはもう全然違いますよ。それは、「自分が、自分が」ということでやっているのと、「私の導きによって来なさい」

というのと、まず心の安らぎが違いますもの。それはもう思い煩いがないですもの。任せればいいんだから。本当に任せていけば、ちゃんと道が開けていく。これは経験してみないとわからない。ヒルティだつて言ってます、

「体験しなさい、体験しなさい。誰でも経験したらいい。踏み出しなさい」ということをさかんにヒルティが『幸福論』の中で言ってますよ。

(金光) そうですね。カール・ヒルティという人は、

「これは理屈ではなくて、とにかく一応そういう方向があるということを知ったら、それを実行しなさい。そうすると体験できる」

と。

(奥田) はい、そう言ってます。だから、私はヒルティさんに共感するんです。

(金光) そういう人間のいわば思いを超えた世界のお話になると、やはり実践の世界でないため、頭でいくら考えてこれに違いないと頭で作らあげたものではないわけですね。

(奥田) 私の頭ではありません。全然、頭ではありません。ただ、

「証明してみろ。科学的に証明しろ。学問的に裏付けてみろ」

と言われたら、

「そんなものは何もありません」

と言うだけであつて、私の生活そのものなんです。

●自分を投げ出す

(金光) そういう話を聞くと、じゃあ自分もそこへ踏み出したいと思つても、さてどう踏み出したらいいいのか、日常生活でその神さまのお徴しるしをどういうふうに分けて受けとれらいいのか、捕まえればいいのかという……

(奥田) それは祈ればいいのかではないでしょうか。そこで簡単に、

「主よ、私をお導きください。主よ、私に新しい道へ踏み出させてください」

と、何でも一番心の中にあるものをぶつけたらよろしいんです、飾らないで。

(金光) 「私は困っています」と。



(奥田) ええ、

「私は困っています。助けてください」と言つて。

福音書に出てくるお話も多いですね。たとえば、子どもさんが癩癩てんかんの病で苦しんでいると、その子の親がキリストに、

「なんとか助けてくれ。もしお出来になるなら、助けてくれ」と言つたら、

『お出来になるなら』なんて条件をつけるな。出来るんだ」

「はい、不信仰な私をおゆるしくください」

と、そこでもう自分を投げ出しているんです。その親は、

「信無き我を憐れあわれみたまえ」

と言いました。信仰なんて始めからあるものじゃありませんもの。いただくものなのです。

(金光) あつ、自分から捕まえるものではなくて……

(奥田) 向こうがくれるわけです。全部、くれるものです、すべて。よきものは全部いただくものです。

(金光) で、それに気がつくと、「あつ、私はこれもいただけた、あつ、これもいただけた」と。

(奥田) そうです。もうすべて、これは自分のものというものは無くなつてしまいます。全部賜りたまわたるものです。健康も、知恵も、力も、その他すべて。だから、学者であれ、あるいはスポーツ選手であれ、誰であれ、「自分はこれだけのことをやった」と威張つていとだめですね。

「これは全部、神さまがくれたんだ。健康も神さまがくれた。怪我をしないでこゝまでやれたのはやはり守られたんだ」

という、そういう謙虚な心の人はどこまでも伸びていく人だと思えます。だから私は、スポーツ選手なんかでも本当に徹している方は道を求める人だという気がします。無私、私無き世界というのと、そういう道を極めるというのとはなにか通じているように思えますね。

●出会いというのが大事

(金光) そこにはやはり日頃から一種のご縁というか、本当に困つているときにはそういう世界に通じている人の話を聞くとか、なにかそういうつながりがないと、頭の中でつちあげるわけにはいなくて、とてもだめですね。

(奥田) それは絶対に必要です。つながりが必要です。出会いというのが、縁というのが大事です。どなただつて誰かを通してこのキリストの世界に導かれたりとか、いろんな素晴らしい本に導かれたりとか、それがきっかけになつてまた新しい世界が開けていくという、



そういう体験をなさっていると思うんです。頭であまり考えすぎるひとはちょっと……
（金光） かつて、それが邪魔をするわけですね。ということは、幸福になるためには何と何が必要ということよりも、むしろ一番大事なことはそういう世界に生きている人にお会いするということですね。

（奥田） はい、そう思います。

（金光） 本を読むよりもむしろ実際その世界で生きている方のお話を直接聞く、そういうお人柄に触れる、そういうのが一番近道ということでしょうかね。

（奥田） はい、そうだと思います。私は本来、教育というものはそういうものだと思うんです。

「どの先生に出会った。あの先生は生涯、私の恩師だ。小学校のときに出会った先生がずっと最後まで自分のお師匠さんでいてくれる」

とか。やはり、教室は知識を授けるところではなくて、人格と人格の触れあいだ、

「あの先生のような生き方をしたい。あの先生のようにになりたい」

とか、それを子ども心に養われるということだと思っんです。大人になりましてもやはり、形は大人でも心はまだまだ幼いというか、真理が開けていない。そういうときに道を求めて、どなたか素晴らしい方に出会うということを求める。そしたらまた、出会いというものが与えられるのではないのでしょうか、そういう願望があれば。

（金光） これは法学部の先生の話でしたけれども、ある理工系の学生に大学で聞いたら、どこかの中学・高校あたりで生物とか、あるいは化学なら化学が好きで先生に出会って、

「あの先生があれだけ楽しんでいらつしやる、その道を自分も行ってみよう」

と思っって大学へ来たという、そういう生徒が非常に多かつたそうです。ということは、その知識ではなくて、その先生の生きている世界の味わいみたいのがなんとなく伝わって、そういうところで来たという。だから、このいわば人生の幸福というような問題でもやはり同じように、

「あの人は金持ちではないけれども、何か豊かな心を持っていらつしやるな」

という、そういう方との接触によつてというのが一番近道といえますでしょうか。

（奥田） よくね、

「あの人のそばに居ればほつとする」

とか、

「自分はひねくれた人間だけれど、あの人のそばにいたら素直になれる。何かほつとする」

とか、そういうことを仰る方がいらつしやるんですね。やはりそういう、なにか自ずとその人から内なるものかじみ出てくる、それだと思っんです。それで、

「一体、あなたは どうして そんな姿で いられるの」

と聞かれると、



「いや、実は私はもうキリストさまに全部委ねてきたらこんなふうになってしまったんですよ」

と。それが本当じゃないでしょうかね。私はそんなふうに思っていますので。

●失われないものに目を向けなさい

(金光) その世界は自分で「ああなりたい、こうなりたい」という計らいを離れた世界ですから、この世だけの命の世界ではもちろんないという……。

(奥田) そうですね。やはり、この世の命にこだわっていたら、それは仕方がありません。この世の命はどうせ百年なんでももの。しかも、年寄れば、あちらこちらが傷いたんでくるし、思うように動きませんしね、そういう衰えていくのが人間なのに、その中でいよいよ澆はつらつ刺と、清々と、生き生きと生きるという、みどりみどりして生きるという、それをくれるのは人間からは出てこないと思います。

(金光) それはそうですね。

(奥田) はい、絶対に出てこない。

(金光) 自分で勝手に生まれてきた人は一人もないわけですから。

(奥田) そうなんです。生まれてくるときも裸だし、向こうへ行くときも裸で去っていく。だから、

「衣食あれば足れりとせよ」

というふうなことをパウロもテモテへの手紙の中で言っています。

私は仏教の詳しいことは知りませんが、やはりいろんな執着を離れるという、そこから始まっているように思うんです。

ルカの福音書の中に面白いお話がありましたね、ある人がキリストのところへ、

「財産分けを命じてください」

と願うんです。キリストは、

「私はなにも遺産分配人ではないよ。あらゆる貪欲に対して人間は警戒しなさい」

と言って警えを語られた。

「ある人が、大変な豊作になって、もう蔵が余るほどにできあがったので考え込んで、『さあ、今の蔵をつぶしてもっとでかい蔵を建てて、そこへ貯まった豊作の物を全部しまい込もう。これで数十年間は大丈夫だ。さあ喜べ、さあ飲めよ』と言ったら、神さまが、『今晚、あなたの魂は奪われるよ。そうすれば、営々として築いたその蔵の中の富は一体誰のものになるのか』と。自分の富だけを求める者は空むなしいんだ」

ということを仰った話があるんですね。

ですから、今仰ったようにやはり、



「自分はもう一度金持ちになりたい、もう一度豊かな生活をしたい」と、それは結構だけれども、その前にやはり、

「失われるものではなくて、失われないものに目を向けなさい」という、それが御意みこころではないかと思うんです。

●「私が道だよ、真理だよ、命だよ」

そこで、キリストさまの方は、「悟り」なんて仰らなくて、

「私が道だよ、真理まことだよ、命だよ。誰でも向こうの世界へ、本ものの世界へ行きかけたのなら、私にくつついて来い。私を通らないと誰も行けないよ」

と。これはなにも全世界で、あらゆる宗教の中でキリスト教だけだというようなことではなくて、あの時代にあのユダヤの世界の中で、

「あなた方は私を通って行けばまちがいないよ」

ということをやったと私は思うんです。なにもキリスト教が独占するとかいうのではなくて、本ものの道は、キリストご自身が本当の道を歩んでいらつしやる。

（金光）これは、死んだらどこかへ行くのではなくて、今この世で生きているときにもう道が、広い道がつながっているということでしょうか。

（奥田）はいそうです。私はさつき、死んだからの命のことを申し上げたのは、この世の命だけだったらあまりにも儂はかないではないかと、特に私は若いときにそう思っていましたので。

「向こうの世界で素晴らしいものが輝いている。そういうものを今既に、今現にいただいている。だから、余計がんばろうじゃないか、余計向こうで輝くような責任ある生き方をしようじゃないか」

という、なにか張り合いが出てくるという、それを申し上げたいんですね。そうすると、「いろんな人にいろんな親切をせざるを得ない。こっち側がなにか豊かにされるから、人に対してもいろいろなお役に立つならいろんなことをしよう」

という、そんな心が湧いてきますわね。

（金光）そういう救いにあずかると、この世は左団扇うちわで過ごせるのかと思つたら、とんでもない話で……

（奥田）とんでもない。それはもう忙しくなるし、この世は修業の場ですわ、本当に。この世で楽しているは向こうで楽できません。この世でいろんな苦しみを持った人、いろいろ人のために尽くした人、そういうのが修業なのであって、そういう人は向こうで輝くんです。

（金光）でも、それは単なる苦しみではなくて喜びに……

（奥田）苦しみではない。やっていることが楽しみなんです、喜びなんです。



(金光) それまでの苦労だったのが苦労でなくなって、新しい世界が見えてくるし、人間の心も豊かになるし、自分で「では、豊かにしよう」と思っても豊かにはなりませんから。(奥田) なりません。私も定年になってから何年も経ちますよね。普通の人は、私の知り合いなんかは左団扇で過ごして、

「私はゴルフをやってきた。私はどこどこへ旅行してきた」と、楽しそうに話してくれるんですが、

「それと比べて私は惨めだね」

なんて(笑)。私は忙しくて忙しくて、いろんなところに引っ張りだされて。でも、それがまた私の喜びでもありますね。

「お役に立っている。私を必要としている人がたくさんいてくれる。だから、精いっぱい尽くしましょうよ」

という、そんな気持ちでおりますので、全然ひがんではおりません(笑)。

(金光) いや、まさに幸福の道を歩いていらっしやるということをうかがいました。どうもありがとうございます。

(奥田) いやいや、失礼いたしました。

(小冊子『試練の中での希望』2011年10月15日発行より転載)

